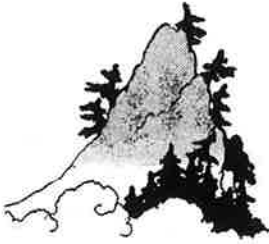


明治の佐伯三青年

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(会員・埼玉県川越市)



「貞雄君勉強しているか。兄貴から手紙があったぞ」
「そうですか」

貞雄は、藤田に校内で声をかけられて少し照れていた。十三歳の貞雄は矢野の三弟である。矢野が大阪に赴任し、藤田が卒業すると入れ代るように、この年明治八年一月に入塾した新入生である。藤田にとってはほんとうの弟のようなものであった。矢野からの手紙で、さきの小論に対する評価もあり、経営者としての雑務も多いが、東京とちがって雑報に耳をかすこともなく、読書に専念できるのが有難いと書かれてあった。

矢野が古老の話にヒントを得て、洋書漁りを始めたのは前に書いた通りだが、この頃は留學生の帰朝も少なく、専門家のいないのも仕方のないことであった。昨年『ローカルタクゼーション』英国の地方税書で苦勞したのもその動機になった。当時洋学の大家として名のあった兵庫県知事神田孝平を父の紹介で訪ね、同書の地方税制の疑問点を質したが、同氏も分らなかつた。それ以来、矢野は独力で地道に研究を続けていた。大阪の生活は、時間に余裕があるのが好都合であった。塾生の中には後年文名を世に馳せた森田思軒もいた。そして父の任地の関

係で備中の人達とも交流ができ、父が東京との往復のついでに立ち寄ってくれるのが、東京との連絡にもなにかと便利であった。父君光儀は備中小田県の知事であることは前に書いた。

その小田県に藤田と同じく上京のチャンスをうかがっている一人の青年がいた。青年は上京遊学の費用を得るために県庁に出仕し、写字生として働いていた。写字生の役目は、主として地券証を書くことであったが、管内各町村から提出される調書を、地券台帳と照会し、時には統計のような仕事もしていた。地券局が地租改正局と改められたのを機に、継続出仕をやめて、上京のため東西奔走していた。今年二十一才になっていた。のちの犬養毅である。

春になって県治条例が改正されて一週間後、四月十四日に藤田にとって人生の転機、あるいは出発点ともなるべき詔が発せられた。年表によると、左院、右院を廃して、元老院大審院をおき、詔して地方会議を興し、もって漸次に立憲の政体を立てんとするを論ず、とある。一体、藤田にいかなる関係があったのであろうか。

政府はこの元老院設置のとき、議員の人選に悩んだ。そして、多数の学識経験者を採用することにして、各新聞社からも人材を抜擢した。そのなかに「横浜毎日」から島田三郎、「郵便報知」から古沢滋が出仕することになった。「郵便報知」では古沢の退社によって、早急に後任が必要となったのである。そこで、編集主宰者であった栗本鋤雲は、親しく知己であった福沢に、後任の人材を依頼したのである。鋤雲は勝海舟嫌いで、たまたま会うと「よくも俺の顔が見られるな」と一歩もひかぬ硬骨漢であったが、福沢が勝と榎本武場の進退を論じた「瘠我慢の説」を書いたとき、先ず両者に意見を求め、のち、旧幕の遺臣木村芥舟と鋤雲に示して、世に発表せざしめていたほど、福沢とは肝胆照らす仲であった。そして、藤田や箕浦の登場となるが、こゝでは先ず当時の新聞界や、「郵便報知新聞」の全貌を書くのが順序であらう。

幕末明治に入ってから廃藩置県までの新聞その他の刊行物は別にしても、本邦における現代的意味の新聞の嚆矢は、明治三年十二月に創刊された「横浜新聞」とされている。「横浜新聞」は翌四年四月には、「横浜毎日新

聞」と改題、新聞名横書を試み、日刊であるばかりでなく鉛活字の活版で、創刊当初は輸入洋紙を使った一枚摺であった。五月になると木戸孝允後援の「新聞雑誌」が現われる。明治五年になると、その数も五十種を数えるようになるが、東京における有力紙は、矢野や藤田がさきに改暦の記事を読んだ「東京日々新聞」、民選議院設立の建白書が発表された「日新真事誌」があり、続いて「郵便報知新聞」が発行され、七年になると、九月に「朝野新聞」（公文通誌改題）、十一月に「曙新聞」の二紙が発行し、前記政論新聞に割込む形となっている。

藤田が恩師福沢に推挙された「郵便報知新聞」とは、明治五年六月に、郵便制度を確立した駅通頭前島密の後援で、郵便支局日本橋横山町太田金右衛門方に「報知社」を置いて週刊紙として発行された。通信原稿を集めたり新聞の発送は特別な便宜を与えられていた。社長は両国の名主であった小西義敬で私財を投じて経営に当り、編集には旧幕臣で文才のあった岡敬彦、飯田良作などが参加していた。間もなく「報知社」は京橋栗研堀に移転し、翌六年六月から日刊となった。両国に近い菓研堀の社屋は、もと相撲年寄・雷権太夫の住居を改造したもので稽

古場が格好な印刷場となり、三階の火見櫓が特徴があった。旧幕の大立物でフランス帰りの栗本勤雲が編集を任されたのは九月である。その頃栗本は、英国帰りの古沢滋を採用して論説を担当させた。古沢が板垣一派に属して「民選議院設立建白書」を執筆した新進の論客であることは前に書いた。すでに五十二歳になっていた栗本は、「岩瀬肥後守の事業」やしゃれた読物、随筆を執筆し、一切の政治記事は古沢に任せていたのである。

福沢は栗本の依頼にこたえて、藤田や箕浦を「報知社」に送り込んだ。「三田の文部大臣」といわれた福沢は、門下生を教師として各地に派遣し、「民間雑誌」の出版に着手し、大衆相手の演説家を養成し、新聞の重要性をも早くから着目していた。そして、藤田や箕浦を「報知社」に送り出すことによって、言論界に一つの橋頭堡を築く形となった。福沢はよく門下生の素質を見極めている。貧乏書生の藤田が実業にむかず、教育者としても煥発すぎる気性は、当時の世相を反映して文才と学識で役に立つ言論界に最適であることを一番よく知っていたのである。藤田にとっても当を得たチャンスであり、その

証拠に藤田ほど長く死ぬまで一新聞社に在籍した者はまれであった。

藤田は一本立ちした。

安下宿にねころんで四年間の苦勞をふり返っているとき、階下で人の声があった。

「おーい。茂吉いるか」

箕浦であった。

ともに入社する箕浦も落ち着かなかつた。

「何をしている」

つかつかと二階に上つて来た。

「矢野さんに手紙を書いたところだ」

「そうか。矢野さんが一番喜んでくれるだろうな」

藤田は、自分の運命を考えていた。

明治四年に郷里の佐伯を出るとき、城山に上つて決心したことが、四年たつて新しい一つの方向に向かいつゝあった。

「箕浦、不思議なものだなあ。おれが佐伯で矢野さんと別れるとき、矢野さんは『時が来れば』と言つた。

そして翌年その通りになつた。今度も又幸運の時がき

たような気がする。しかし雑報記者ならいざしらず一流新聞でなにが書けるだろうか。不安の方が先なんだよ」

箕浦もその通りであつた。

「茂吉。なにを言うか、おれはおまを頼りにしているんだぞ。波多野もくるといふし、困つたときは先生に助けを借りるさ」

おっとりした箕浦が話す通りである。不安の中にも福沢の後楯があるのが、一つの救いであつた。

二人は前祝に新橋に足を向けた。

歩きながら、希望と不安の入り交つた二人の会話は、志士気取りになつたり深刻になつたり妙な気持ちであつた。

藤田のもう一つの不安は、世相にうといことであつた。矢野が一切の世事を忘却して諸制度の研究に没頭する影響が多分にあつた。しかし、そんなことは言っておれなかつた。矢野よりも一歩先に実社会に出る冒険は、一か八かの勝負である。藤田は持前の負けん気で、すでに腹を決めていた。

新橋に登楼すると、こゝにも二人の就職を祝ってくれる人がいた。豊吉であった。

「それはそれは大へんな出世ですこと」

豊吉の喜びようは一通りではなかった。

苦勞の甲斐があつたと思つた。貧乏学生にかけた熱意と愛情が報われて、全身にその喜びを表わしていた。

「出世か」

藤田は、忘れていた言葉を思い出して苦笑した。

「出世かもしれない。借金で飲む酒が自分の金で飲めるようになる」

老成ぶつた箕浦の口調に、顔を見合わして笑つた。

藤田は、今の今まで新聞の活字のことばかり考へていたが、箕浦に「自分の金」と言われて、ふと自分の生活に気がついた。成程、仕事の不安はあるが、これで生活の安定は保証されると思つた。

「豊吉、これからはじゃんじゃん酒が飲めるぞ」

これが藤田の戦法である。頭と言葉に裏腹なところがある。しかし豊吉にとっては、どのぐらいついた頼もしい言葉であらう。

「はいはい。国中の酒を飲んで下さい。それでも足り

なければ、当世はやりのイギリスとかフランスの酒もとり寄せますわ」

「イギリスにフランスの酒か。それはいい」

二人は手をたゞいてはしゃいだ。

そのなかで豊吉は、藤田の着物の破れを見つけて気にかけていた。
(つづく)

訂正

一二九号(追悼号)の五四頁最後の歌「燃と輝く」は「燦と輝く」の誤り。その他にも校正ミスが多いので、あとは賢明な会員の皆さんの御判読を願います。

「訂正記事は新聞記者の『向うキズ』」とか言うが、校正ミスは編者にとってまことに後味が悪い。第一筆者に対してまことに申し訳ないし、読者に対しても相すまない。それなら「ミスのないように校正すればよい」が理屈はその通りだが、なかなか理屈通りにいかないところが人間の弱点らしい。

編集、一校、二校、三校となるとあいてしまう。それに時機を失してはならない仕事が行っている、ついにいらする。でも驚馬にむち打ちながら、倒れない程度に努力するつもり、御寛容を請う。
(塩月佐一)